

貝毒とは

二枚貝(アサリ、カキ、ムラサキガイなど)が貝毒の原因プランクトンを餌として食べるにより体内に毒素を蓄積させる現象のことです。

貝が毒化するしくみ

貝はプランクトンを餌としています。プランクトンの中には貝毒の原因となる毒素を持つものがあり、海域でこれらのプランクトンが発生すると、貝がこれらのプランクトンを食べ、徐々に毒素を体内に蓄積し毒化していきます。ただし、貝毒の原因プランクトンは常に発生しているわけではありませんので、常時、貝が毒化しているものではありません。また、貝毒は、原因プランクトンが海域からいなくなると徐々に貝の体内から減っていきます。

貝毒の種類と症状

貝毒はその症状により麻痺性貝毒、下痢性貝毒などがあります。

貝毒の種類	原因プランクトン	症 状
麻痺性貝毒	アレキサンドリウム・パシフィカム アレキサンドリウム・カテネラ ギムノディニウム・カテナータム など	食後30分程で舌、唇、顔面、手足のしびれなどが起こり、最悪の場合は呼吸麻痺などで死亡することがあります。
下痢性貝毒	ディノフィシス・アキュミナータ ディノフィシス・フォルティ ディノフィシス・コウダータ など	食後30分～4時間以内に下痢、腹痛、嘔吐及び吐き気が起こり、通常は3日以内に回復し、現在のところ死亡例はありません。

貝毒の監視及び規制

県では、アサリやヒオウギガイなど二枚貝の食品としての安全性を確保するために、貝毒の原因プランクトンの発生状況調査と二枚貝の毒量の検査を定期的に行っています。

この検査で規制値を超える毒量(下表参照)となった場合は、出荷の自主規制が行われます。また、マスコミなどを通じて、潮干狩りの方々などにも注意を呼びかけます。

貝毒の種類	規制値	規制値の概要
麻痺性貝毒	4.00MU(マウスユニット)/g を超える値	麻痺性貝毒の場合、1MU/gはむき身の抽出液1mlを体重20gのマウスの腹腔部に注射したとき、マウスを15分で死亡させる毒量のことです。
下痢性貝毒	0.16mgOA当量/kg を超える値	下痢性貝毒の検査は平成29年4月1日より機器分析法へ完全移行となり、オカダ酸(OA)群に対して0.16mgOA当量/kgの規制値が定められています。

※麻痺性貝毒の人の最低致死量は、体重60kgの人で約3000MUといわれています。